

地域の情報

ランチョンセミナーの開催

葉石 光一*・大庭 重治*・八島 猛*

1 はじめに

特別な支援を必要とする子どもの教育には多岐にわたる専門的知識が要求される。心理学的知識はその中心的なものの一つである。平成22年度より、特別支援教育コースの大庭と葉石の発案により始めたランチョンセミナーの主な目的は心理学や脳科学に関する最近の知見に接する機会を学生に提供することである。

2 概要

セミナーは原則として長期休業（8月、9月、1月、3月）を除く月の第三火曜日の昼休みに行っている。12時15分から45分の30分間で、話題提供と若干の質疑を行っている。会場は本学人文棟8階特別支援教育演習室1を利用している。運営は葉石、八島、大庭が行っている。発足以来、本学の学習心理学、認知心理学、発達心理学、心理統計学、臨床心理学を専門とする教員にも声をかけ、議論や話題提供に多大な御協力をいただいている。

3 開催実績

表はこれまでのセミナーの開催実績をまとめたものである。第1回から第6回は平成22年度、第7回から第12回は平成23年度、第13回から第18回は平成24年度の開催であり、これまで年間6回のペースとなっている。取り上げた内容は報告者の専門分野であり、それぞれのテーマに関する最新の情報を提供することができている。

このセミナーには、基本的に本学特別支援教育コースの学生が多く出席している。しかし、セミナーは学内掲示により全学的に周知するなど、誰に対してもオープンなものとして位置付けており、他コースや他大学の学生が出席することもあった。例えば、第4回以降、北海道教育大学函館校細谷一博准教授（本学修了生）の研究室メンバーは Skype を利用して毎回参加している。また第5回には、東京学芸大学の院生がセミナーに出席した。

表 ランチョンセミナーの開催実績

回	内容及び報告者
第1回	知的障害と実行機能（葉石光一）
第2回	点字とディスレクシア（大庭重治）
第3回	筋ジストロフィーと自尊感情（八島 猛）
第4回	きこえの障害と音の方向知覚（小林優子）
第5回	脳の情報解読による幼児の心の探究（森口佑介）
第6回	日本版WISC-IVの紹介（葉石光一）
第7回	児童用自尊感情尺度の検討（中山勘次郎）
第8回	慢性疾患児の自己概念（八島 猛）
第9回	知的障害者の眼球運動特性（葉石光一）
第10回	日本の子どもの誤信念理解（内藤美加）
第11回	Imaginary companion: 子どもが持つ想像上の友達
第12回	てんかんの予後と心理（八島 猛）
第13回	知的障害者の眼球運動機能と年齢（葉石光一）
第14回	慢性疾患児の友人関係と自尊感情（八島 猛）
第15回	学校保健における睡眠健康教育（山本隆一郎）
第16回	てんかん児における疾患への態度、スティグマ、精神的健康（八島 猛）
第17回	幼児を対象にした実行機能のトレーニング研究（森口佑介）
第18回	ディスレクシアと書字学習支援（大庭重治）

* 上越教育大学大学院学校教育研究科

4 成果と今後の課題

平成22年度及び23年度は、ランチョンセミナーの取り組みが上越教育大学研究プロジェクトの一つに採択された（プロジェクト名称「特別支援教育の理解推進を促すためのランチョンセミナーの活用に関する研究」）。多忙な教育現場での効率的な研修方法の一つとしてランチョンセミナーを活用する方法について検討した。このプロジェクトを通して収集した参加者の感想のうち、ランチョンセミナーのような形式で行う研修の良い点としては、「気軽に聞ける」「30分でも多くの知識・知見が得られた」「忙しい中で時間を効率的に使える」「短い時間なので集中できてよい」といったものであった。多忙な教育現場でまとまった研修時間を確保することは簡単ではない。また短い時間では結局大した成果があがらないという考え方もある。しかし上記のコメントは短い時間で行う研修にもそのメリットがあることを示している。あくまでも短時間で、まとまった研修の入り口として、最新の研究成果に関する情報を収集する機会として位置付ければ、このような形式で行う研修にも十分なメリットがあると思われる。30分間のセミナーというのは、聴く側が気軽であるだけでなく、運営する側の負担感も少ない。このようなことも、息の長い営みとして学びを継続していくことにつながるメリットであろう。

ただし参加者の感想のうち、セミナーに対する要望として多くあげられたのは「質問やもう少し深く聞いてみたい内容があると物足りないときもある」というものであった。上記のようなランチョンセミナーのメリットを生かしつつこういった要望に応じようとするなら、セミナーとは切り離して内容を議論する場を別に設けられるとよいかもしれない。これについては、構想のみで実現していないが、インターネット掲示板のようなシステムを用意するといった方法が考えられる。セミナー自体の身軽さを失ってしまうようなことのないようにすることを心掛けつつ、時間と場所の制約を軽減できるインターネット環境を導入していくことは、今後のセミナーの発展性を探る上での課題の一つであろう。